

イネクダアザミウマの 有害動植物リスク分析

平成 24 年 2 月

横浜植物防疫所

第1章 ステージ1：イネクダアザミウマに関する有害動植物リスク分析の開始

1 - 1 開始：(開始するに至った問題の本質、目的)

イネクダアザミウマは現在検疫有害動植物として取り扱われているが、検疫有害動植物については、平成16年5月21日に公表された「植物検疫に関する研究会報告書」で「検疫有害動植物については、輸入植物の用途や輸送形態も考慮し、可能な限りリスクの定量的な評価を含めて、適時適切なPRA（有害動植物リスク分析）を実施し、それぞれのリスクに応じた措置となるよう検証し、対応していくことが適当。」とされた。

このため、イネクダアザミウマの有害動植物リスク分析を見直すこととした。

1 - 2 有害動植物リスク分析地域の特定

日本全域と特定する。

1 - 3 対象となる経路及び潜在的検疫有害動植物

1 - 3 - 1 経路

イネクダアザミウマが発生する地域から輸入される寄主植物を経路と特定する。

1 - 3 - 2 潜在的検疫有害動植物

イネクダアザミウマ（学名：*Haplothrips aculeatus* (Fabricius)）を潜在的検疫有害動植物と特定する。

1 - 4 情報

生物学的な情報は、別紙のとおり。

1 - 5 開始の結論

検疫有害動植物の取り扱いについては、「植物検疫に関する研究会報告書」において、付着する植物の用途や輸送形態を考慮しつつ、随時適切な有害動植物リスク分析を実施する旨の指摘があったことから、有害動植物リスク分析を実施する必要性が生じた。

本種を潜在的検疫有害動植物と特定し、また、本種の発生国の寄主植物を経路と特定し、我が国全域を対象として、植物検疫措置に関する国際基準 No. 11「検疫有害動植物のための有害動植物リスク分析」に基づき、有害動植物リスク分析を開始する。

第2章 ステージ2：有害動植物リスク評価

2 - 1 植物検疫上の取り扱いに影響するイネクダアザミウマの特性等

2 - 1 - 1 系統

植物検疫上考慮すべき系統に関する情報は見つからなかった。

2 - 1 - 2 未発生有害動植物のベクター

ベクターとなることに関する情報は見つからなかった。

2 - 1 - 3 日本での分布状況及び公的防除の有無

イネクダアザミウマは、北海道、本州、四国、九州及び沖縄に分布している。本種は、公的防除の対象ではない。

2 - 1 の結論

イネクダアザミウマは、北海道、本州、四国、九州及び沖縄に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。よって、有害動植物リスク分析は中止する。

別紙

和名	名: イネクダアザミウマ ^{3), 4), 6), 7)}
学名	名: <i>Haplothrips aculeatus</i> (Fabricius) ^{1), 3), 4), 6), 7)}
英名	名: rice aculeated thrips ⁴⁾
分類	類: アザミウマ目 (Thysanoptera) ^{1), 4), 6), 7)} クダアザミウマ科 (Phlaeothripidae) ^{1), 3), 4), 6), 7)}

分布: (日本) 北海道、本州、四国、九州、沖縄^{1), 3), 6), 7)}
(世界) イラン、台湾、トルコ、中国、朝鮮半島、バングラデシュ、ベトナム、イタリア、ギリシャ、スウェーデン、スペイン、スロバキア、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、ベラルーシ、ポーランド、ポルトガル、リトアニア、ルーマニア、ロシア、アメリカ^{1), 3), 6)}

寄主植物: ムクゲ、ワタ属植物、ハウレンソウ、ダイコン、アヤメ、イネ科植物、キュウリ、アザミ、エゾギク、キク、コスモス、ダリア、タンポポ、クワ、ニンジン、ツツジ、ヤブミョウガ、タバコ、ナス、エンドウマメ、シロツメクサ、ダイズ、ハリエンジュ、マメ科牧草、タマネギ^{1), 4), 6), 7)}

形態・生態: 雌成虫は、体長1.5～1.8 mm。赤褐色又は暗褐色。中にはクチクラがあまり着色せず、皮下の赤い色素がまだらに分布するのが目立つものもある。雄成虫は、体長1.4～1.6mm。体色は雌と同様。耐低温性は高く、厳冬期でもムギ、チガヤ等の心葉や葉鞘の基部で発見される。越冬虫は早春より活動し始め、水田又は苗代に飛来し、幼苗の葉を加害する。越冬は成虫で行い、少なくとも年間2世代を経過する。^{6), 7)}

被害: イネアザミウマと同様にイネ科植物を主に加害する。水田での発生生態はイネアザミウマとほぼ同じで、被害は幼苗期の葉の食害及び出穂期以降の子実の食害の2つの時期に分かれるが、水田における生息密度は、イネアザミウマに比較してはるかに低いので、実害を及ぼすことはあまりない。ただし食害の程度は激しい。ムギでは中国の例ではムギに多発し被害が大きい、日本での被害程度は明らかでない。サトウキビでは多発すると葉が黄化して成長が阻害される。^{6), 7)}

ベクター

・ 系統: 植物検疫上考慮すべき系統等が存在するとの記述はなく、日本未発生 of 有害動物のベクターとなる旨の記述もない。^{1), 2)}

防除法: イネ等においてアザミウマ類に対する登録農薬がある。⁵⁾越冬成虫・幼虫の密度低下を目的として、広域に休閑田耕起を行い、イネ科雑草などの寄主植物を土中に埋没させる耕種的防除が有効である。⁶⁾

文献: 1) CAB International (2011) Crop Protection Compendium. CABI (<http://www.cabi.org/cpc/>)
2) CAB International (2011) Plant Protection Database (1972-2011/10). Silver Platter International N. V. (<http://ovidsp.ovid.com/>)
3) 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室 編 (1999) 日本産昆虫目録データベース. 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html>)
4) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会、東京: 387pp.
5) 独立行政法人農林水産消費安全技術センター (2011) 農薬登録情報検索システム (<http://www.acis.famic.go.jp/>)
6) 梅谷献二・工藤巖・宮崎昌久 編 (1988) 農作物のアザミウマ 分類から防

- 除まで全国農村教育協会、東京：422pp.
- 7) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 全国農村教育協会、東京：1203pp.